

ジボタルも多く発生する。

本町は山に囲まれているものの山は低く、花崗岩地が多く、しかも傾斜が急であるため保水力に乏しい。そのために灌漑用の溜池が多数存在し、その数は大小合わせて四〇を超える。溜池には国や福岡県などの指定する絶滅危惧種をはじめ、希少な植物が多数生育している。

二 山地の植生

1 竜ヶ鼻の植生

竜ヶ鼻はカルスト台地平尾台の最南端の地域で台地の斜面は急峻な崖地である。南北に走る小さな稜線をはさんで東側は勝山町、西側は田川郡香春町、台上は北九州市小倉南区に属している。本町の最高点は標高六七〇^{メートル}であるが台地の最高点はやや北方にあつて標高六八〇・六^{メートル}である。台地上では三菱マテリアル東谷鉦山により石灰石の採掘が行われており、本町に属する部分もすでにかなりの面積が削り取られている。

竜ヶ鼻の上部は傾斜四〇度以上の危険な岩場で、人を寄せつけない部分も少なくない。山頂部は竜ヶ鼻台と呼ばれ、平坦でススキやネザサの草原である。斜面は標高四〇〇^{メートル}付近まではスギ・ヒノキの人工林であり、それより上に自然林が広がる。西側の香春町に属する部分は石灰岩地に特有のイワシデを中心とする夏緑樹林であるのに対し、東側の本町側はヤブニツケ



写真1—9 竜ヶ鼻のイワシデ林
(標高630^{メートル}地点)
イワシデは岩場に斜上して伸びている

イ、アラカシ、タブノキなどの照葉樹林になっている。

植生調査は香春町との境界になつている稜線沿いの標高六六五^{メートル}から五四〇^{メートル}の間の五か所で実施した。標高六〇〇^{メートル}付近まではアラカシ、タブノキ、シロダモ、シラカシ、ヤブニツケ

イなどが高木層を形成している。亜高木層の優占種はヤブツバキで、ほかにイヌガヤ、イヌガシ、カゴノキなどがあり、低木層の優占種はアオキである。標高六〇〇^{メートル}より上部には、わずかな範囲であるが帯状にイワシデ林が分布している。ここではイワシデの亜高木をはじめオオコマユミ、バイカウツギ、シロバナハンショウヅル、ウラジロガシ、ヤマカシユウ、ヤマブキ、ツルマサキ、スズシロソウ、ミツバベンケイソウ、ミヤコミズなど、石灰岩との結び付きの強い好石灰植物や岩場によく育つ岩角地植物などが出現した。

2 仲哀山地の植生

仲哀隧道のある仲哀山地は稜線の高さは三二〇〜四〇〇^{メートル}あまり高くはないが、町内で最も自然林の残る山地である。し

表1—1 竜ヶ鼻の植物組成表

2001.9.25調査

方形区番号		1	2	3	4	5
高 度 (m)		665	630	600	570	540
方 向		S	S20E	S30E	S	S
傾 斜 (°)		10	40	40	15	20
面 積 (m ²)		10×10	10×10	20×20	10×20	20×20
出 現 種 数		24	46	42	34	32
植 物 高 (m)	高 木 層	なし	8~15	8~20	8~20	8~18
	亜 高 木 層	なし	3~8	3~8	3~8	3~8
	低 木 層	1~2	1~3	1~3	1~3	1~3
	草 本 層	0~1	0~1	0~1	0~1	0~1
植 被 率 (%)	高 木 層	なし	40	95	95	100
	亜 高 木 層	なし	90	90	90	70
	低 木 層	90	50	60	20	20
	草 本 層	80	20	10	5	20

方形区番号	1	2	3	4	5	常在度	方形区番号	1	2	3	4	5	常在度
ヤブニッケイ T ₁ T ₂ S	5	2	3	4	+	V	オオコマユミ SH	+	+	+	·	·	Ⅲ
ヤブツバキ T ₂ SH	+	+	2	4	3	V	シロバナハンショウヅル H	+	+	+	·	·	Ⅲ
テイカカズラ H	+	+	+	+	+	V	クマワラビ H	·	+	+	·	+	Ⅲ
ナガバジャノヒゲ H	+	+	+	+	+	V	マメヅタ H	·	+	+	+	·	Ⅲ
アオキ SH	·	+	3	3	3	Ⅳ	ナルコユリ H	·	+	+	+	·	Ⅲ
イロハモミジ T ₁ S	·	3	2	3	+	Ⅳ	シロダモ T ₂ H	·	·	+	+	+	Ⅲ
カゴノキ T ₁ T ₂	1	·	1	1	2	Ⅳ	タブノキ T ₁ T ₂	·	+	·	1	3	Ⅱ
ネズミモチ T ₂ SH	·	+	1	+	3	Ⅳ	ウラジロガシ T ₁ SH	+	·	2	·	·	Ⅱ
イスガヤ T ₂	·	1	+	+	+	Ⅳ	シラカシ T ₁	·	·	1	1	·	Ⅱ
モミジウリノキ SH	·	1	+	+	+	Ⅳ	イスビワ SH	·	1	+	·	·	Ⅱ
カヤ T ₁ T ₂ SH	·	+	+	1	+	Ⅳ	イタビカズラ H	+	·	+	·	·	Ⅱ
イスガシ T ₂ SH	·	+	+	+	1	Ⅳ	イボタノキ H	+	+	·	·	·	Ⅱ
オモト H	+	+	+	+	·	Ⅳ	ヤブコウジ H	+	·	+	·	·	Ⅱ
イワガラミ H	+	+	+	+	·	Ⅳ	ナキリスゲ H	+	+	·	·	·	Ⅱ
キツタ H	+	·	+	+	+	Ⅳ	ミヤマウグイスカグラ S	·	+	·	+	·	Ⅱ
ツタ T ₂ H	·	+	+	+	+	Ⅳ	ヘクソカズラ H	·	+	+	·	·	Ⅱ
ヤマヤブソテツ H	·	+	+	+	+	Ⅳ	スズシロソウ H	·	+	·	+	·	Ⅱ
アラカシ T ₁ T ₂ S	1	·	4	5	2	Ⅲ	ミヤコミズ H	·	+	+	·	·	Ⅱ
ケヤキ T ₁ T ₂		2	2	·	3	Ⅲ	チヂミザサ H	·	+	·	+	·	Ⅱ
イワシデ T ₂ S	+	4	+	·	·	Ⅲ	ヤマカシユウ H	·	+	·	+	·	Ⅱ
シロダモ T ₂ S	1	1	·	·	+	Ⅲ	ミツバベンケイソウ H	·	+	·	+	·	Ⅱ
ホンバタブ T ₂ S	·	+	+	1	·	Ⅲ	ツルマサキ H	·	+	+	·	·	Ⅱ
ハマクサギ S	·	·	1	+	+	Ⅲ	バイカウツギ S	·	·	+	+	·	Ⅱ
ハナイカダ S	·	1	+	+	·	Ⅲ	シラキ T ₂	·	·	·	+	+	Ⅱ
ヤマブキ SH	+	+		+		Ⅲ							

1つの方形区だけに出現した種類 () は被度階級

第1方形区：コバノチョウセンエノキ (1)、マルバオダモ、ニガキ、ナツトウダイ、ススキ

第2方形区：フクリシズカ、トネリコ、コバノガマズミ、ヤブラン、ヒメアザミ、ヒトリシズカ、アキチヨウジ、サンショウ

第3方形区：イスノキ (2)、シュンラン、クリハラン、ヨツバムグラ

第4方形区：エノキ (2)、ヤマアイ

第5方形区：アカガシ (4)、イスシデ (1)、シキミ、ヤマフジ、ツルシキミ、ヤマボウシ (1)、サンゴジュ、ウンゼンカンアオイ、フユイチゴ、ヒラオヤブソテツ

注 植物組成表 (表1—1~表1—3) の見方

・T₁は高木層、T₂は亜高木層、Sは低木層、Hは草本層を示す。

・被度および被度階級 = ある種類が方形区 (植生調査区域) の地表面に占める割合を被度とよび、被度階級で示す。

被度階級	植物の占める面積	被度階級	植物の占める面積
5	方形区全体の1~3/4	2	方形区全体の1/4~1/8
4	3/4~1/2	1	1/8~1/16
3	1/2~1/4	+	1/16以下

・常在度 = 調査した方形区のどれだけにその植物が出現したかを20%ごとの5段階 (V~I) に分けたもので被度および常在度の高い種類がその群落の優占種となる。



写真1—10 仲哀公園のソメイヨシノ
九十九折の沿道に1000本の桜が咲く

かし、その東向きの斜面では、標高二〇〇^〇以下の部分は人工林、モウソウチクの林または若い雑木林などとなっている。また、旧仲哀隧道に通じる九十九折の坂道の一帯は仲哀公園とよばれ多数のソメイヨシノが植えられ、桜の名所となっている。ここでは標高二〇〇^〇以上がおおむね自然林であるが、特に新仲哀隧道より南側の部分ですぐれている。山地は花崗岩地で、標高二〇〇^〇以上は三五度以上の急傾斜地であり、随所に巨岩があり、ところによっては岩屋を形成している。そのような地形・地質部分であるために植林ができず、自然林が保たれてきたものと考えられる。現在、稜線に至る登山道もない。

植生調査は新仲哀隧道付近の標高二五〇^〇から稜線までの間で、ほぼ直線的に行った。自然林は全体的にはツブラジイの群落である。シイの木は胸高直径が四〇^〇〜五〇^〇であることから樹齢は五〇^〇〜六〇^〇年であり、終戦前後に伐採された後、再生したものと思われる。また、稜線部や岩場にはアカマツの朽ち木が今なお残っており、かつてはアカマツ群落も存在したと思わ



写真1—11 仲哀山地の花崗
岩上のツブラジイ群落

れる。
シイ群落の中には全体として高木層にクロキ、カクレミノ、シロダモ、タブノキ、リョウブ、コナラ、ヤマザクラ、ノグルミなど、亜高木層や低木層ではヒサカキやネズミモチ、草本層ではヤブコウジ、テイカカズラ、シユンランなどの常在度が高くなっており、植物社会学的にはスダジイ^{II}ヤブコウジ群落の範疇に入るものである。高木層の樹木がよく茂っているために林床にはあまり光が届かず、低木層以下の植物は貧弱である。また、一般のシイ林に普通に見られるヤブツバキやアオキが非常に少ないのも特徴である。

3 障子ヶ岳の植生

障子ヶ岳へは上野から長い杉山を抜けて行く道と味見峠や宮原から稜線を行く道がある。味見峠からの稜線は高さ数^〇メートルのごく若い樹木の二次林でタブノキ、クスノキ、ヒサカキ、ネズミモチ、クロキ、ナナメノキ、シヤシャンボなどの照葉樹とノグルミ、アカメガシワ、ヌルデ、ヤマハゼ、クマノミズキ、アキニレ、カラスザンショウ、ネムノキ、クリ、コナラ、ヤマボウシ、コシアブラ、コマユミなどの夏緑樹が混在する全くま

表1—2 仲哀山地の植物組成表

2002.5.28調査

方形区番号		1	2	3	4	5
高	度 (m)	250	260	315	330	335
方	向	E10N	E10N	E10N	E	E10N
傾	斜 (°)	28	35	30	稜線平坦地	40
面	積 (m ²)	20×20	20×20	20×20		15×20
出現種数		26	20	12	38	36
植物高 (m)	高木層	10~20	8~16	8~20	7~13	8~18
	亜高木層	4~10	3~8	3~8	3~7	3~8
	低木層	1~4	1~3	1~3	1~3	1~3
	草本層	0~1	0~1	0~1	0~1	0~1
植被率 (%)	高木層	100	100	100	90	100
	亜高木層	90	90	80	80	80
	低木層	20	10	10	70	50
	草本層	10	10	5	20	40

方形区番号	1	2	3	4	5	常在度	方形区番号	1	2	3	4	5	常在度
ヒサカキ T ₂ SH	3	4	3	+	4	V	テйкаカズラ H	+	・	・	+	+	Ⅲ
リョウブ T ₁ T ₂	1	3	1	1	2	V	イヌシダ T ₂	+	・	・	・	1	Ⅱ
クロキ T ₁ T ₂ SH	1	2	1	1	+	V	ヤブツバキ SH	+	・	・	・	+	Ⅱ
カクレミノ T ₁ T ₂ SH	+	+	1	1	2	V	アラカシ T ₂ S	+	・	・	・	+	Ⅱ
ツブラジイ T ₁	・	5	5	4	5	Ⅳ	カキノキ S	・	+	・	1	・	Ⅱ
コナラ T ₁ SH	5	2	・	3	1	Ⅳ	ハイノキ S	・	+	・	1	・	Ⅱ
ヤマザクラ T ₁ T ₂	2	+	・	2	+	Ⅳ	ウラジロガシ T ₁ T ₂ H	・	・	+	・	2	Ⅱ
ヤブコウジ H	+	+	+	3	・	Ⅳ	コガクウツギ H	+	・	・	・	+	Ⅱ
ネズミモチ T ₂ S	+	・	1	+	+	Ⅳ	ヤブムラサキ SH	・	+	・	+	・	Ⅱ
シロダモ T ₁ SH	+	・	+	+	1	Ⅳ	イヌツゲ H	+	・	・	1	・	Ⅱ
タブノキ T ₂ SH	+	+	+	・	+	Ⅳ	ミヤマシキミ H	・	+	・	・	+	Ⅱ
サルトリイバラ H	+	+	・	+	+	Ⅳ	ヤブニッケイ T ₁ H	・	・	・	+	+	Ⅱ
シュンラン H	+	+	+	・	・	Ⅲ	サンショウ SH	・	・	・	+	+	Ⅱ
ノグルミ T ₁ T ₂ H	+	・	・	2	+	Ⅲ	タムシバ T ₂ S	・	・	・	+	+	Ⅱ
ヤマハゼ T ₁ T ₂ S	・	+	・	+	+	Ⅲ	アオキ SH	・	・	・	+	+	Ⅱ
ウラジロ H	+	+	・	・	+	Ⅲ	ヒメユズリハ T ₂	2	・	・	・	・	Ⅰ
ヤマフジ H	+	+	・	・	+	Ⅲ	ヤマボウシ T ₁ SH	・	・	・	2	・	Ⅰ

1つの方形区だけに出現した種類

第1方形区：シリブカガシ、シシガシラ、ベニシダ

第2方形区：シャシャンボ、シキミ

第3方形区：マンリョウ

第4方形区：カゴノキ、ヤマツツジ、カマツカ、ヤマコウバシ、ナワシログミ、ゴンズイ、ミヤマウグイスカグラ、ススキ、ワラビ、ヤマシロギク、アマドコロ、ナルコユリ、ナカバモミジイチゴ、ナガバタチツボスミレ

第5方形区：コバノミツバツツジ、イヌガシ、ハマクサギ、クサギ、コバンノキ、ナガバジャノヒゲ、マムシグサ、ヘクソカズラ、チヂミザサ、タイリンアオイ

注 植物組成表(表1—1~表1—3)の見方

・T₁は高木層、T₂は亜高木層、Sは低木層、Hは草本層を示す。

・被度および被度階級はある種類が方形区(植生調査区域)の地表面に占める割合を被度とよび、被度階級で示す。

被度階級	植物の占める面積	被度階級	植物の占める面積
5	方形区全体の1~3/4	2	方形区全体の1/4~1/8
4	3/4~1/2	1	1/8~1/16
3	1/2~1/4	+	1/16以下

・常在度=調査した方形区のどれだけにその植物が出現したかを20%ごとの5段階(V~I)に分けたもので被度および常在度の高い種類がその群落の優占種となる。



写真1—12 障子ヶ岳山頂部（城跡）
草地が広がる

とまりのない林である。道端ではオカトラノオ、ヤマハツカ、ヤクシソウ、ノコンギク、シラヤマギク、ノダケ、サイヨウシヤジンなどの草本植物がみられる。

障子ヶ岳までの途中「もみじの森」付近で小範囲ながら直径が三〇〜五〇センチのタブノキ、カナクギノキ、クロキ、ノグルミ、イヌシデ、ヤマザクラ、コナラ、クスノキなどの高木にクマノミズキ、アカメガシワ、シロダモ、ヒサカキ、ネズモミチ、カクレミノ、アオキなどの亜高木や低木を交え、昔の森の姿を感じさせる所が残っている。障子ヶ岳の山頂直下の斜面にはコナラを優占種に高木層にリョウブ、タブノキ、イヌシデ、ヤマザクラ、ノグルミなどの生育する林分がある。

障子ヶ岳山頂は標高四二七・三メートルで中世の城跡である。近年までは採草地として利用されていたといわれるが、草の需要がなくなると雑木が茂り、城跡とは思えないほどになっていた。それを一九八八年に町おこしのために木を伐採して城跡の姿が見えるようにした。それ以来毎年手入れが行われているために草原が保たれている。山頂からは町内のほとんどの地域が見渡

せる。

草原は、ススキ、ネザサ群落で、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウ、アキノノゲシ、クララ、クズ、ヤブカンゾウ、ナルコユリ、ノダケ、カワラナデシコ、キキョウ、オトコエシ、シオデ、サイヨウシヤジン、ヤマハツカなどが見られ、草原性の植物の増加が今後も期待できる。

4 南部山地の植生

飯岳山（大坂山）から犀川町と境する低い稜線が東にのびている。図師には城坂峠があり県道大久保犀川線がここを越えている。この稜線は更に御所ヶ岳へと続く。この山地は花崗岩でできており、図師の一带は近年までアカマツ林であった。しかし、アカマツはマツノザイセンチュウ（松喰虫）の食害により



写真1—13 下久保山のアカマツの群落
巨大な花崗岩上に生えている

次々に枯れて山は裸同然の姿になり、現在は松の間に生えていた小さな木々がようやくよく生長してきた段階である。花崗岩地は貧栄養で乾燥がひどく、また、山は高さ約一キロのシダ植物のウラジロやコシダが密生しているため、たとえ植物の種子が散布されても生育しにくいものである。現

在、高さ四〜五メートルまでに生長した樹木はクロキ、ヤマモモ、リヨウブ、ネジキ、ヤマザクラ、コナラ、シリブカガシ、アラカシ、タムシバなどである。したがってこれからも樹木は増え続けるが、もとのようなアカマツ林が再生されることはなく照葉樹林へと遷移するであろう。

タムシバは分布上注目し値する存在である。この植物はもともと気温の低い暖帯上部から温帯にかけて生育するものであり、本町のような暖帯下部の地に群落があるのは極めてまれである。タムシバの花はコブシに似た白い花で、三月下旬から四月上旬にかけて山を彩る。

城坂峠から東に約四〇〇メートルに入った所に標高二二〇メートルの下久保山があり、その南西斜面には面積は約一畝とあまり広くはないが、巨大な花崗岩の岩盤が露出した所がある。樹木は岩盤のくぼみや割れ目にかかるうじて生育しており、他では見られない景観を呈している。かつては大きなアカマツが生育していたようであるが、ここでも枯れて高さ五メートルまでの幼木のみになっている。高木はなくアカマツと同様の亜高木にコナラやコシアブラがあり、低木層にはソヨゴ、コナラ、ヒサカキ、ネジキ、クロキ、リヨウブ、マルバアオダモ、イヌザンシヨウ、クリ、クロバイ、コシアブラ、シリブカガシなど、草本層にはこれまでの樹木の幼木のほかにコシダ、ウラジロ、イヌツゲ、マルバハギ、シャシャンボ、コガクウツギ、ヤマツツジ、アリノ

トウグサ、トダシバ、チガヤ、ワラビなどが出現した。

三 社寺林の植生

勝山町では標高五〇メートル以下の平野部に多数の小さな森が散在している。その多くが古墳であったり、神社であったり、また、溜池の周辺であったりする。神社林の場合、森全体が自然林であることはまれで、たいていその一部はスギ、ヒノキの植林に変えられている。ここでは胸の観音、勝山神社、綾塚古墳、扇八幡古墳、箕田大池の五か所の森について調査した。五か所とも優占種はツブラジイであり、亜高木層ないし低木層にミミズバイが出現するので本町の低地のシイ林は植物社会学的にはスダジイ・ミミズバイ群集に属する。町内のシイにはツブ



写真1—14 扇八幡古墳の後円墳上の植生

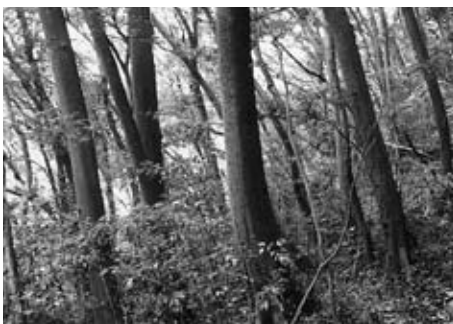


写真1—15 胸の観音駐車場付近のシイ群落